

しゅんぎく

—— 発病・加害時期
 === 発病・加害最盛期

作型・病害虫名		月											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
春まき／秋まき(ハウス)				●	■	●	■			●	■	●	■
秋まき					●	■			●	■	●	■	
夏まき						●	■		●	■			
						↑	雨よけ	↑					
べと病					—	—	—	—	—	—	—	—	—
炭そ病						—	—	—	—	—	—	—	—
葉枯病						—	—	—	—	—	—	—	—
萎凋病						—	—	—	—	—	—	—	—
アブラムシ		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ヨトウムシ					—	—	—	—	—	—	—	—	—
ハスモンヨトウ					—	—	—	—	—	—	—	—	—
シロイチモジヨトウ					—	—	—	—	—	—	—	—	—
マメハモグリバエ		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

べと病

留意事項

- 1 低温多雨時に発生が多い。

防除方法

- 1 密植を避け、通風を良好にする。
- 2 排水を良好にし、過湿を避ける。
- 3 ハウスでは、換気を良好にする。
- 4 被害茎葉を早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 5 発生が見込まれる時期に、予防的に下記の薬剤を散布する。

- ・ [クプロシールド](#) M1 【野菜類 1,000~2,000倍 —/—】
- ・ [Zボルドー](#) M1 【野菜類（除キャベツ） 500倍 —/—】

炭そ病

留意事項

- 1 アミスター20フロアブル、ストロビーフロアブルは、浸透性を高める展着剤を加用しない（薬害）。QoI剤（11）は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

防除方法

- 1 種子伝染を防ぐため、採種から1年以上経過した古い種を用いる。
- 2 密植を避け、通風を良好にする。
- 3 排水を良好にし、過湿を避ける。
- 4 窒素過多を避ける。
- 5 雨よけを行う。
- 6 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 7 発生が認められる時期に、予防的に下記の剤を散布する。
 - ・ [アミスター20フロアブル](#) 1 1 【2,000倍 前日／2回】
 - ・ [ストロビーフロアブル](#) 1 1 【3,000倍 14日／3回】

葉枯病

留意事項

- 1 高温多湿で発生しやすい。
- 2 水はねによって病原菌が伝搬し、蔓延することが多いので注意する。

防除方法

- 1 密植を避け、通風を良好にする。
- 2 排水を良好にし、過湿を避ける。
- 3 窒素過多を避ける。
- 4 雨よけを行う。
- 5 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

萎凋病

留意事項

- 1 連作により発病しやすい。
- 2 高温期に多発する。地温の低下により発病が減少し、15℃以下では発病しなくなる。
- 3 茎の導管部の褐変が見られる。
- 4 過剰な施肥により発生が助長される。

防除方法

- 1 連作および過剰な施肥を避ける。
- 2 ハウスでは夏期高温時に、太陽熱利用による土壌消毒を行う。(Ⅻ土壌消毒1 参照)
- 3 以下の薬剤による土壌消毒を行う。(Ⅻ土壌消毒2 (4) 参照)
 - ・ [バスアミド微粒剤](#)、[ガスタード微粒剤](#) 劇 一
 - 【20kg／10a 均一に散布して土壌と混和 は種21日前／1回】
- 4 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

アブラムシ類

留意事項

- 1 スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤の成分ジノテフランの総使用回数は3回以内（但し、は種時及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布は2回以内）。

防除方法

- 1 ハウスの開口部を寒冷しゃや防虫ネット（目合い0.8mm以下）で被覆する。
- 2 露地では被覆資材を用いてべたがけ栽培、トンネル栽培を行う。
- 3 ほ場内や周辺部の除草を徹底する。
- 4 発生を認めたら下記の薬剤を施用する。
 - ・ **ダントツ粒剤** 4 A 【6kg/10a まき溝処理土壌混和 は種時/1回】
 - ・ **アディオン乳剤** 3 A 【4,000倍 21日/2回】
 - ・ **モスピラン顆粒水溶剤** **劇** 4 A 【8,000倍 3日/2回】
 - ・ **スタークル顆粒水溶剤**、**アルバリン顆粒水溶剤** 4 A 【3,000倍 前日/2回】
 - ・ **ウララDF** 2 9 【4,000倍 前日/2回】
 - ・ **粘着くん液剤** — 【野菜類 100倍 前日/—】

ヨトウムシ類

留意事項

- 1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

- 1 ハウスの開口部を寒冷しゃや防虫ネット（目合い4mm以下）で被覆する。
- 2 露地では、被覆資材を用いてべたがけ栽培、トンネル栽培を行う。
- 3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ **ディアナSC** 5 【ハスモンヨトウ 2,500~5,000倍 前日/2回】
 - ・ **コテツフロアブル** **劇** 1 3 【ハスモンヨトウ 2,000倍 14日/2回】
 - ・ **プレオフロアブル** UN 【ハスモンヨトウ 1,000倍 前日/2回】
 - ・ **アフーム乳剤** 6 【シロイチモジヨトウ 2,000倍 7日/2回】
 - ・ **カスケード乳剤** 1 5 【ヨトウムシ・ハスモンヨトウ 2,000~4,000倍 7日/2回】
 - ・ **BT剤** 1 1 A （IX野菜類の病害虫防除 3野菜類 参照）

マメハモグリバエ

留意事項

- 1 ハウス内では1年中発生する。
- 2 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の成分ジノテフランの総使用回数は3回以内（但し、は種時及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布は2回以内）。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

防除方法

- 1 ハウスでは、収穫後（5～10月の晴天が続く日）にうね全面をビニルで被覆し、地表下の温度を上げて地中の蛹を殺す。
- 2 収穫後の作物残さは集めてビニルで覆っておくと、成幼虫を殺虫することができる。
- 3 ハウスの開口部を寒冷しゃや防虫ネット（目合い0.8mm以下）で被覆する。
- 4 ハウスの被覆資材として近紫外線カットフィルムを利用し、虫の行動を抑制する。
- 5 露地では被覆資材を用いてべたがけ栽培、トンネル栽培を行う。
- 6 ほ場内や周辺部の除草を徹底する。
- 7 マメハモグリバエが発生しにくい作物（イネ科作物等）と輪作を行う。
- 8 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [ダントツ粒剤](#) 4 A
 【ハモグリバエ類 6kg/10a まき溝処理土壌混和 は種時/1回】
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) 4 A
 【ハモグリバエ類 9kg/10a まき溝土壌混和 は種時/1回】または
 【ハモグリバエ類 9kg/10a まき溝土壌混和 定植時/1回】
- 9 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アファーム乳剤](#) 6 【ハモグリバエ類 2,000倍 7日/2回】
 - ・ [カスケード乳剤](#) 1 5 【2,000～4,000倍 7日/2回】
 - ・ [ディアナSC](#) 5 【ハモグリバエ類 2,500～5,000倍 前日/2回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。